

OS-08 「オノマトペの利活用：オノマトペ研究の分野横断連携を目指して」

オーガナイザ：小松 孝徳（信州大学）
中村 聡史（京都大学）

「オノマトペの研究、とりあえずサクッと集めてみましょうか？」というヒゲでメガネなオーガナイザ2名の軽い思い付きから始まった、オーガナイズドセッション（以下、OS）「オノマトペの利活用」. 昨年の盛岡での開催に引き続いて、本年の山口での開催も成功裏に終えることができました。つきましては、人工知能学会の事務局の皆様、OS担当プログラム委員および評者の皆様、そしてOSに参加していただいたすべての皆様に改めて御礼申し上げます。

擬音語・擬態語などの総称であるオノマトペは、物体の音の響きやその状態などを感覚的に表現したものであるため、一般語彙と比べると臨場感にあふれ、直観的かつ繊細な表現を可能としているという特徴があります。このようなオノマトペに注目し、その特性を生かしたユーザーインタフェース、デザイン手法、インタラクション技術の開発を目指そうという研究、さらには言語学、民俗学、医学などさまざまな研究分野における問題点をオノマトペという新たな切り口から読み解こうといった研究を一同に会し、分野横断型の連携を模索していくことが本OSの目的です。

本年は、データベース、ロボティクス、自然言語処理、HCI、認知科学、エスノメソドロジ、言語学など、ひとくくりにとまとめることなど到底不可能なさまざまなバックグラウンドをもつ方々が一同に会し、合計19件の発表を「肴」に2日間にわたって有意義な議論を行うことができました。

本OSでは、参加者の皆さんがこの機会を利用して、新しい共同研究をスタートさせることを一つの目的として前面に掲げています。そこでオーガナイザ2名はこの目的を達成するために、「このOSは研究者同士のお見合いパーティーである」と考えることにしました。このようなアナロジーを利用することで、「共同研究のスタート＝カップルの成立」と考えることができ、OSの運

営にも同様のアナロジーを適用できるからです。

お見合いパーティーの参加者は、まず自己紹介によって、どのようなパートナーを求めているのか、どのような将来を築きたいのかという自らのアピールを行います。さらには、気になった人とはじっくりお話する機会も重要です。その際、会場の空気が良かったり、盛り上げ上手な司会者がいると、カップル成立数が増えるかもしれませんね（注：オーガナイザ2名は実際にお見合いパーティーに参加したことがないので、これは勝手な想像であることをご承知おき下さい）。

そこで本OSにおいても、発表者には、発表する研究は昨年度に作成したオノマトペ研究マップ[1]のどの位置に相当する研究なのか（自己紹介）、この研究をどのように発展させていきたいのか（将来の夢）、どのような共同研究を求めているのか（理想のパートナー像）、などオノマトペ研究に関する「秘めたる思い」を、発表中に述べていただくこととしました（発表＝アピールタイム）。さらには、議論を活性化するためにtwitterでのOSの実況、Ustreamでの生中継などを実施し（空気って大切ですよ）、加えてオーガナイザ2名はテンションをいつもよりやや高めに設定するなどの配慮を致しました（盛り上げ役の司会者）。また、すべての発表が終わった後は、参加者をいくつかのグループに分けて、オノマトペ研究が取り組むべき仮説および方向性についてのディスカッション、そして楽しい楽しい懇親会（なんと5時間も飲みっぱなし！）の開催などにより、気になるあの研究者の方とお近づきになる機会を提供することができ、結果として参加者間の交流の活発化および議論の活性化に一役買ったのではないかと自負しております。

本OSで得られた具体的な成果として、次年度につながる研究のカップリングが行えたことと、分野横断型の研究の指針となるべき「オノマトペ研究における仮説および目的」についてしっかりとディスカッションが行えたことの2点があげられます[2]。特に後者に関してはこのディスカッションを通じて、複数の言語にまたがるオノマトペ研究が存在していないこと、オノマトペ成立に関する歴史的経緯などの分析が欠けていること、さらにはオノマトペのインタラクティブ性や、インタラクティブ性以外の効率化や時間制約に関する多くの仮説が検証されていないこと、などといった新たなオノマトペ研究の可能性に気づくことができました。

さらに、料理や医療などといったそれぞれのドメインでオノマトペがどのように使われているかをデータベース化することで、ドメイン依存型もしくは非依存型のオノマトペを分類したり、オノマトペとはどの程度「万能な表現」なのかを検証すべきという具体的な課題も提案されました。



会場風景

またその一方で、現在のオノマトペ研究のグランドセオリーが明確に示されていないという点も指摘されました。ディスカッションを通じて浮かび上がってきたこれらの課題に対して、オノマトペ研究者それぞれが積極的に取り組んでいくことが、オノマトペ研究の分野横断型連携の確固たる礎になるのではと期待しています。

というわけで、来年の富山で開催される全国大会においても、「オノマトペの利活用」セッションを開催することを計画しています。その際には、今年度のお見合いパーティーの成果が多数発表されること、そしてもちろん、この拙い文章に目を留めていただき「なんだ、オノマトペのセッションって、意外とおもしろいのかな?」と思っていただいた皆様の興味本位な参加が増えて下さることを、オーガナイザ2名は心待ちにしております。

本 OS に関連する情報につきましては、随時 Web にて公開していきますので、ご笑覧いただけますと幸いです [3, 4]。来年、皆様と一緒に富山でキトキトな魚介類を楽しみながら、ワイワイガヤガヤとオノマトペ談義に花を咲かせられますように!

参考 URL

- [1] http://www.tkomat-lab.com/2011-JSAI-OS_Discussion2.pdf
- [2] <http://www.tkomat-lab.com/jsai2012/JSAI2012-onomato.pdf>
- [3] <http://www.tkomat-lab.com/jsai2012.html>
- [4] <http://www.tkomat-lab.com/jsai2011.html>

[小松 孝徳 (信州大学), 中村 聡史 (京都大学)]